
夏川ほたるの取扱説明書（マニュアル）

朝霧 雄飛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏川ほたるの取扱説明書マニュアル

【Zコード】

N1838P

【作者名】

朝霧 雄飛

【あらすじ】

取扱説明書、略して取説。その取説を愛して止まない美少女がいた。その名は夏川ほたる。ある夜、ほたるはメカニック研究所に侵入した。それはレアな取扱説明書、略してレア説を手に入れためだつたのだ!!俺はほたると出会い、取説を探すために様々な場所へ駆り出されていく。その裏でほたるを狙っている組織がある」とを知らずに。

初めての小説なので文法など間違があると思います。広い心

で見ていただくと幸いです。

プロローグ 1

メカニック・・・修理工や整備士のことである。特に自動車整備士のことをメカニックと呼んでいる。日本では機械という意味合いとしても用いられている。

プロローグ

俺は今、メカニック研究所にいる。窓を見ると外はいつの間にか暗くなっていた。綺麗な満月が夜空に浮かんでいる。

「ふああ、眠い」

大きなあくびが研究所内に響き渡る。周りには修理を待っている機械が辺り一面に散らばっている。それは集団で俺を囲み、「修理をしてくれ」と要求しているように見えなくもない。とはいっても俺には直すことが出来ない。それよりか逆に壊してしまった可能性の方が高いだろう。

否、すまない、調子に乗ってしまった。必ず壊してしまった方が正しい。

「さあて、睡眠スプレー改の完成まで後、少しだ」

俺は発明作業を再開した。睡眠スプレー改とは少量を吸うだけでぐっすり眠ることができるスプレーのことだ。睡眠障害で悩んでいる人達を助けるために開発をしている。今日の昼までに大部分が完成していた。後は、外側のラベルを貼るだけである。デザインは俺が尊敬して止まないエジソンの肖像画とすでに決めていた。

俺はラベルを貼りながら今日の出来事を振り返っていた。機造さんの優しい笑顔。機造さんのツナギ姿。機造さんがタオルで汗を拭いている姿。機造さんが・・・・・。

「お、俺、何を考えているんだ。機造さんのことしか頭に入っていないじゃないか」

俺は、他に何か記憶に残っているものはないかと思い出そうとした。しかし、頭の中の引き出しをいくら開けても機造さんことばかりである。他には何も出てきそうにならない。

「これが恋といつものなのだろ?」

手元を見るといつの中にラベルは貼り終えていた。エジソンの顔が横長になっている。その顔がおかしくて笑いそうになつたが、何とか我慢した。人に見せるときはラベルを隠すことにして。但し、その分エジソンの偉大さを伝える本を渡すつもりだ。

「やつたあ、ついに完成だ!」

俺は完成した睡眠スプレー改を床に置いてみた。どこからどう見ても完璧だ。性能もデザインもサイズも形も全てにおいて欠点がない。いわゆる自画自賛というやつである。傍からみると自画自賛するのはおかしいと思う人がいるかもしない。しかし、これは悪いことではないと考える。親は自分の子供が一番かわいいと言つし、ペットの飼い主も自分のペットが一番かわいいと言つし、それと同じ気持ちである。自分の発明品もわが子同然なのだ。

プロローグ 1（後書き）

この作品はFNC小説からの転載です。

プロローグ 2

「やべー、もう夜の9時50分だ。早く学校を出ないと捕まってしまうう

俺は急いでロッカーにある荷物を取りに行つた。この学校は夜の10時までに校門から出ないと拘束されてしまうからだ。

第一未来高等学校。通称、一高。新聞には政府が社会実験として作った学校としてよく取りあげられている。この学校には変わった特色がある。それはロボットが先生の代わりをしているということだ。

人型ロボットが黒板の前で授業をする。小型ロボットが教室内を飛び回り、寝ている生徒にチョークを発射する。昼休み後の授業ではチョークがミサイルのように飛び交う。そうなつてしまえば授業どころではない。世界大戦ならぬ教室大戦の開幕である。教科書はたちまち盾へと役割を変え、チョークから身を守ってくれる。おすすめの盾は化学の実験書である。軽いしつえ、面積が大きい。また値段も手ごろなので盾には最適である。

この学校が作られた目的としてはいじめや学級崩壊など、現代社会が抱える問題を解決するためだと言われている。また見回りロボットが24時間巡回している。もし、夜10時を超えて学校にいることがバレでもしたら、すぐに拘束され、学生証を奪われてしまう。つまり強制退学である。まあ、普通に生活していれば夜の10時を超えることはないのだが。

プロローグ 2（後書き）

学校生活の様子もこれから書いてこいつと譲ります。

プロローグ 3

俺はロッカーの荷物を取り、玄関へと向かった。強制退学なんてされたら、機造さんと会う機会が少なくなってしまう。機造さんと話すことが少なくなってしまう。機造さんと・・・。しまった。また機造さんのことばかり考えている。け、決して機械のことを忘れたわけではない。機械も愛している。大好きだ。だが、杏、やはり、でも・・・。

そんなことを考えている内に玄関が大きく見えてきた。息遣いが荒くなっていく。それが原因なのか、どうなのかはよく分からないが顔がいつの間にか熱くなっていた。壁近くに置いてある振り子時計をちらりと見た。時刻は夜の9時52分。十分に間に合う時間だ。

「よかつたあ。余裕じゃねえか。焦つて損した」

俺はこのとき朝、遅刻、ギリギリで教室に入つてくる生徒と同じ心境だった。ギリギリセーフというときには、先生は遅れて入つてくる。そのとき誰もが決まってこう言つだらう。「焦つて損した」または「走つて損した」と。こういうときは注意力を失い、一瞬の気の緩みを生じているものだ。

しかし、その気の緩みが時に悲惨な出来事を起こすこともある。ぜひ覚えて頂きたい。席に着くまでが登校、家に帰るまでが遠足なのだと。前振りが長くなってしまったが要するに言いたいのはこういうことだ。

俺は睡眠スプレー改を吸つてしまつた。

それは一瞬の出来事だった。転がっていた鉄の棒を踏んでしまって前へと倒れた。そのときとっさに伸ばした手が見事にボタンを押してしまったのだ。握力の弱い方でも楽に使つてもらえるようにボタンにしたのが裏目に出てしまつた。特性の睡眠ガスが顔に襲い掛かってくる。さきまで必死になつて働いていた瞼が途端に仕事を止め、帰り支度を始めた。

俺は瞼に向かつて必死に語りかけた。頼む、ちょっとだけ残業をしてくれないか。家に着くまででいいから。残業代として「ほつとアイマスク」をつけてやるから。おまけにブルーベリーヨーグルトもつけるから。

そんな願いを当然聞き受けてくれるわけもなく、俺は眠りに落ちた。夜の10時を知らせるチャイムが学校中に響き渡る。少し遅れて、研究所の振り子時計の鐘が鳴り響く。床には睡眠スプレー改が転がつていた。勢いで押したボタンはへこんだままだった。

第1章 眠れる美少女の取扱説明書 P1 (前書き)

長い文章ですが読んで頂けると凄く嬉しいです。

俺は道を歩いていた。周囲には石壁があり、電柱や家が並んで立っている。見渡す限り色は白黒だった。このような景色ははつきり見て見たことがない。でも、白黒テレビの中に入れば体験できるのかもしれない。それはそれで面白そうであるが、そんなテレビを発明したら人が画面から出てくるということになる。俺はすぐに考えるのを止めた。髪の長いあの人にはテレビの中に居てもらわないと非常に困る。まだ死ぬわけにはいかないのだ。

少し恐怖感を抱きながら、道を歩いていると先に人影が見えてきた。一つの影しかないところを見るとどうやら一人だけのようだ。近づくにつれて黒いシルエットの形がはっきりとしてくる。俺はその人が誰なのかすぐに分かつた。今まで、何度も写真で見てきた人だつたからだ。

「エジソンだ。エジソンがいる」

俺はエジソンに向かつて走り出した。憧れの人人が目の前にいる。自然とテンションが上がり、心臓の鼓動が激しくなつていく。今にも死んでしまいそうだ。

「エ・エジソンさん。は、初ま、初めまして」

俺は極度の緊張のあまり噛んでしまった。手足の震えも止まりそうにない。

「初めまして。閃光雄太君」

エジソンは椅子に座つたまま返事をした。

「どうして俺の名前を知っているんですか」

「そんなの当たり前だよ。夢なんだから」

エジソンは笑みを浮かべていた。

「あ、あの俺エジソンさんの大ファンなんです。写真も家に飾っていますし、それに・・・」

思いを伝えようとすると気持ちが先走り、口の動きを早くする。こんな一方的に喋つたことは今まで一度もない。

「すまない。話すのを止めてくれ。時間がないんだ」

さつきまで笑みを浮かべていた顔は真剣な表情へと姿を変えた。周りの空気が一瞬冷たくなるのを感じた。

「これから話すことを覚えていて欲しい。大事な話なんだ」

エジソンは椅子から立ち上がり、表情を変えずに話し始めた。

「君はこれから一人の女の子を守ることになる。その子は不思議な力を持つている。詳しいことは言えないが、それは世界を動かす鍵となるだろう。当然、その子を狙つてくる組織もいるはずだ。いいか、でもこれだけは覚えておけ。絶対にその子を組織に渡すな。渡せば世界が崩壊してしまう」

俺は何を言つているのかよく分からなかつた。女の子。不思議な力。組織。世界崩壊。はつきりいつて意味が分からない。

「エジソンさん。何を言つているんですか。俺にはさっぱり・・・」

「もう時間だ。いいか、最後に伝えておく。とにかくその子を守れ！」

「いいな！」

そう言つうとエジソンは俺から離れるように歩き出した。

「ちょっと、待つてくれ」

手を伸ばしながらエジソンを追いかけた。しかし、周囲が漆黒に覆われていき、彼の姿が見えなくなつていった。自分の手も見えなくなつってきた。

「エジソン…………」

彼は一度も「ちらりを振り向く」ことはなかつた。必死に叫んだ声は闇へと消えてしまったのかもしれない。俺は闇に包まれると同時に意識を失い、その場に倒れた。まさか目が覚めると、目の前に眠りの美少女がいることも知らずに。

第1章 眠れる美少女の取扱説明書 P1（後書き）

リングは怖いので見ていません。エジソンは助言者としてこれからも登場予定です。次はいよいよヒロインの登場です。異色の趣味を持った女の子は好きですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1838p/>

夏川ほたるの取扱説明書（マニュアル）

2010年11月28日04時09分発行